



恋

罪

作者さんや読み手さんの声は
<http://www.columnland.net/> にてどうぞ

おちる

私はどこにでもいる。朝会社へ向かう電車の中にも、放課後の教室にも、今あなたが踏み出そうとしているその先にも。けれど大抵の人には見えない。皆気付かないまま、私の中へ落ちてゆく。

私に足をとられた人間というのは可笑しいものだ。熱に浮かされたように思い悩み、悶え、すっかり私の虜になる。論理だとか思慮だとか、日々作り上げた冷徹な器というのは、どうも落ちる時に手から離れてしまうものらしい。誰もが皆、胸を熱くし、苦しい苦しいと喘ぎながら、奥へ深くへと落ちてゆく。彼らには己の落ちた穴の底が見えないのだろう。必死にもがき、何か掴もうと手を伸ばす。可哀想なくらいに滑稽なその姿を見ながら、私はほくそ笑む。その拙さは、私を感動させる程には美しい。

しかし人間というものは学習する生き物で、何度も私の中へ落ちていく内に、その存在を事前に感じ取るような者も出てくる。その種の人間の中には、息を潜めて待ち構えている私を、敢えて避けて通る者もいる。冷徹をしつかり握りしめ、引つ掛からないぞといわんばかりにステップを踏んでみせる。成る程、彼らは人間が言う「利口な生き方」を演じているつもりなのだろう。軽やかなステップに渴いた拍手を送りながら、私は次の獲物を待つこととする。愚かな美しさを捨てた人間などには、私は興味が無い。

だがまこと不思議であるのは、私の息を感じておきながら、わざとその中へ落ちようとする者の存在である。ある時は素知らぬ振りをしながら、ある時は助走をつけて飛び込んで、彼らはやってくる。苦しみもがくのは皆同じなのだが、彼らはそれにさえ快樂を感じているようにも見える。何故？ 一種のマゾヒズムなのか。その愚かさが美しいと知っているというのか。私にはわからない。誰もが幸せな顔をして「苦しい」という。私にはわからない。もうずっと昔から、人間は私という存在の定義付けに躍起になってきた。私にはわからない。太古の昔私が生まれたのは、人間のこの異常な快樂に名前を与える為だったのか。誰もが呟く。「恋に落ちたのよ」と。

FALL IN LOVE

僕は虫だった
いつも地面に這つくばって
襲かかる脅威に怯える虫だった

僕は何もできず
ただ地面を這って耐えていた

気づいたら僕は高い所にいた
まるで脱皮をするような格好で
僕は下を眺めていた
下に広がる雄大な地面を見て
僕は地面に“恋”をしてしまった

この地面なら僕を受け入れてくれる
僕もきつと羽ばたけるんだ

そう思ったらなんだか嬉しくなった

そして僕は蛹から蝶へと変化し

大空へと舞った

今僕は空を飛んでいる
下に群がる人々を見下ろし
僕は優雅に空を舞っている
地面とのキスは痛かったけれど
地面はやっぱり僕を受け入れてくれた

もう何に脅かされることなく
僕は自由に羽ばたける
地面とまたキス出来ないのは寂しいけれど
僕は自由になれた喜びを全身で感じ
天高くどこまでも飛んでいく

恋愛と恥に関する考察

英語で Love という語が意味するところを、日本語は「恋」と「愛」に区別する。より動物的に物事を捉えるならば、感情は好悪の二元論で考えるのが自然であるように思われるので、この点においては英語の方がより率直で原始的であると言える（無論これは印欧語族が日本人に比べ原始的ということの意味するのではない）。このことから、恐らく「恋」と「愛」という二語は元々一つの言葉であり、文化・社会の成熟とともに区別されるようになったのではないかと想像される。厳密な定義がなされているかは知らないが、私の印象では「恋」という語は「愛」に比べると「手に入らないものに対する憧れ」という意味合いが強く、より能動的・欲求的であり、またその対象は概ね人間の異性である。「クルマを恋す」と言うのと「愛す」と言うのに比べて幾らか狂的な印象を受ける。それに対して「愛」は「包容」「無償」「平等」といった語とともに使われることが多い。

恋は憧れであると言ったが、憧れは所有欲の一種であることに異論を差し挟む余地はないかと思う（「無償の恋」という言葉には違和感がある。傍に居たい、一目見たいという欲求にも相手の協力は不可欠である）。そして、サドがやや過激だが的確に捉えたように、性愛と所有欲は不可分である。相手を自分のものに属させること及び相手のものに属すること、肉体的・精神的な合一こそが恋愛の最終目標である（ただし精神的な合一は幻想に過ぎない。より正確には幻想でないということを確認する術を持たない）。所有の徹底、という見方を理解すれば肉体を破壊し相手をモノとするサディズムは決して特異な性癖ではないこともわかる。

ここで問題となるのは性愛に絡む罪悪感・背徳感である。生命の誕生に必要であるセックスに関わるものが、肉体が蔑視されるのは何故か。バタイユはエロティシズムと禁忌を不可分とし、セックスを彼の言う《連続性》への欲求を満たすものとして捉えたが、この見方は多分にキリスト教的・ギリシア的な価値観に基づくものであり、私にとって腑に落ちるものではなかった。また他者の前で交接を行うことは無防備な姿

をさらすことになり危険なため本能的に避けているのだとする説があるが、それならば我々は他者の視線に「恐怖」を感じなければならない（我々が暗闇を恐れるように）。しかし我々が感じるのは「恥」と呼ばれる類の感情である。さらに言えば、恥を感じることでより性的興奮が高まるものも少なくなく、寧ろその禁忌は破られることを前提としているとさえ考えられることから、生存にかかわる恐怖といった重大な問題からは無縁であるように思われる。

この疑問に答えるには、前述の「恋」と「愛」の区別が糸口となる。この二語の区別は文化・社会の成熟にともなうてきたものと考えたが、「(性的な) 恥」もまた社会の価値観に依存するものである。女性の乳房を見られることを恥としない社会は多く、また逆に日本でも他者の前での接吻を恥と考える人は未だに多い。つまり性的な恥は、社会がその発展のために生み出した概念であると考えられる。何故社会が恥を必要としたかについて明確に答えることは出来ないが、恐らくその理由の一つは、ヒトを人間として教育するためではないかと思う。プラトンは政治を人間の為し得る最高の行為として、共同体へのエロスこそが最高の徳であるとしたが、彼の名を冠した「プラトニック・ラブ」は肉体的交渉を伴わない精神的な愛情を意味する（ちなみにプラトンが言ったわけではない）。これは婚前交渉を避け、問題が発生するのを未然に防ぐために導入されたシステムとして捉えられる。共同体はその構成員が彼個人の遺伝子を残せるかどうかについては基本的に無関心であるが、その一方で社会自身の生存のために、社会全体に貢献しうる人物に積極的に活躍の場を与えようとする。つまり構成員に対して、生物的欲求を満たすことよりも社会的欲求を満たすことを優先させようとして、その手段として「恥」というシステムが導入されたのではないか。高学歴者は婚期が遅く、また結婚していても子供が多くないという事実はこの考えを支持しているように思われる。

セックス・パートナーに対する恋か、共同体への愛か。決して両立不可能な問題ではないが、両者の意味を改めて考え直してみることは重要である。

ソノの島

遠い遠い西の海、数千種類の青に抱かれて浮かぶその島には、ひとりの風使いが住んでいる。若葉色の瞳と漆黒の髪を持つ、迂闊に触れば碎けてしまいそうなほど華奢な少女。人は彼女をソノと呼ぶ。それが本名であるか否かは定かでない。けれど、島の住民たちが産まれるより遙か昔から、彼女はその名で呼ばれていた。そう、

風使いのソノは老いを知らない。島に歴史ができたその始めから、島の中央の小高い丘に建つ風車塔で、たったひとり住んでいる。

その日、ある少年が風車塔を訪れた。ほんの少し朱色の混じった金の蓬髪の隙間から、いかにも少年らしい生意気な目で、彼は塔の扉をにらみつけている。手には大きな袋が提げられていて、中にはおよそ三日分の食糧が詰めてあった。

「ソノ、持って来たぞ」

まだ声変わりも経ていない幼い声で、彼は塔に向かって呼びかける。すると突然、何の前触れもなく風が吹き、重厚な塔の扉を押し開けた。

「いつもありがとう、入ってきていいわよ」

建物の中から、ソノが少年に言葉を返す。その声色は彼女自身の外見にそぐわず、ひどく大人びている。

少年が塔の内に入ると、吹き抜けの天頂に張り巡らされた内軸から、ソノがふわりと舞い降りた。半透明の布を無数に重ね着した彼女の姿は、まるで妖精のようにみえる。その顔に浮かべられた溶けるような笑顔に、少年は思わず見惚れた。

「どうかしたの？」

「べ、別になんでもねえよ」

あまりにわかりやすい彼の反応に、ソノはひそかに笑みを漏らす。彼はこの島を統べる豪家の一人息子で、人里離れて暮らすソノに日々の食糧を持ってきてくれる。幼き頃に洗礼を受け、人という枠組みを半ば脱してしまっているソノにとつて、食事という作業はもはや絶対的に必要なものではなかったが、それでもこういった島民たちの気遣いは嬉しい。

気が遠くなるような昔、まだソノが風使いになったばかりのこと、この島は月に一度は暴風の吹き荒れる不毛の土地であった。けれど、ある青年と駆け落ちをしたソノは、彼女らの故郷から遠く離れたその島を、自分らの住処として定めた。ソノの力をもってすれば、島周辺の

気候を操作することも、それほど難しいことではなかったのだ。

そうして穏やかな四季を得た島は、次第にソノたちの子孫で栄え、閉じた社会を作り上げた。けれど、そんな牧歌的な光景のなかで、ソノはひとり孤独だった。彼女の恋人は、ソノをおいて年をとり、移り住んでから四十年後に埋葬された。寿命に関しては子孫たちも同様で、いつの日かソノは島民と距離を置くようになっていた。

(この子は、とてもよく似ている)

おそろくは自分を好いてくれているのだろう少年を見つめながら、ソノは静かに懐古する。可愛らしい程に気の強い性格も、しなやかな強さをうちに秘めた青い瞳も、過去にソノが恋した青年とそっくりだった。

「ソノ、俺は昨日十二歳になった」少年が、いつになく気負った声でソノに告げる。十二といえば、この島においては成人の年であり、その後の生き方を長老に誓う年でもあった。「俺はこの島を出る。明後日の晩、沖を囲む風の壁を解除してくれ」

「——っ、そんな」

あまりに想定外のその言葉に、ソノは思わず狼狽する。ごく稀に、島を出たがる人間もないわけではない。けれど彼は、ゆくゆくは島を統べる立場の人間なのだ。

「父上に口伝を受けた。島の歴史も、ソノの身体のことも、全て聞いた」思いのほか大きい少年の手が、ソノの両肩に据えられる。「風の洗礼を受けるために俺は大陸に渡る。島の存続を、ソノひとりに押しつけておくなんて、そんなことは間違ってる」

少年の言うそれは、明らかに世迷いごとだった。洗礼を受けることは、決して容易いことではない。そもそも、彼に風使いの才があるかどうかさえわからないのだ。

けれどそれなのに、少年の彼とよく似た口調のせいで、ソノは諫めの言葉を口にすることができない。

「ソノ、だから待っていて欲しい。俺はきっと、君にふさわしい人間になって帰ってくる」

その生意気な少年の言葉に、けれど涙を流しながらソノは頷き、そしてゆっくりと口を開く。

「気高き君に、風の御加護があらんことを」

彼らの頭上で、ソノとともに悠久を過ごしてきた四枚の風羽根が、穏やかな風を受けてゆっくりと回っている。幼き恋の、その行く末を見守るように。

恋し思ひ

恋と云ふものに諦めを覚えたのは何時のことだろう。

私とて昔は恋と云ふものに大きな憧れを抱いていた。自分だつて何れは誰か一人を愛して止まなくなるのだと信じて疑わなかった。

だがしかし、如何だろう。

成長し大人へと近づいた私の頭にその様な考えが存在し得るだろうか。答えは否だ。

思つてみれば、恋ほど曖昧なものなど此の世には無い。恋と云ふものが目に見えない物であるからばかりで無い、恋をしているのもしていないのも本人にしか分かり得ない事だからだ。星の数ほど居るのではと思われる人々の中から、誰か一人を選び出し、その人の事で頭が一杯になるなど、本当に有り得るのだろうか。有るとするならば、そんなものは恋への憧れが生み出した他愛無き幻想だ。

人々はよく学生時代は青春だなどと評す。

しかし、実際こうして女学生となつてみると、青い春などとは名ばかり、日々代り映えの無い学校生活に氣持を持て余し氣味になる一方。その持て余し氣味な心が恋愛感情に向くかと云へば、そうでもなく只淡々と過す日々。そもそも半日近くを毎日共に過す学校の男子に氣など向く訳無いではないか。

私は周りの雑踏を見やる。じりじりと照り付ける日に陽炎が立ち上がり、人々の姿を、輪郭を、じんわりとぼかしていく。

こうした学校の行き帰りでさえ、沢山のひとと擦れ違ふが、運命などと云ふ物には未だ嘗て出逢つた事が無い。結局、そんなものなのだ、人生なんて。

私は汗ばんだ首筋を手の甲で拭う。蟬の音が鼓膜を揺らす。五月蠅い。声に出さずに呟くと、まるで暑さが助長されたかの様に感じられ、知らず知らずの内に足取りが重くなった。

歩く速度が落ちたせいだろうか。ふと、周りの景色が先程よりも、よく目に入る様な氣がした。

そう、きっとそのせいなのだ。向かひの道路を歩く

男子生徒の姿に氣付ひてしまったのは。この暑さの中、まるで汗一つ掻いて居ない様な涼しい顔で雑踏の中を歩く彼の姿に目を止めてしまったのは。

くらぐらと眩暈を感じる様な暑さの中、陽炎で視界が歪んで居るにも関わらず、彼だけは嫌にはつきり見えた氣がして、私は強い吐き氣を覚えた。見てはいけないのだ。氣付ひてはいけなかったのだ。

それでも、尚、一度視界に捕へてしまったならば、もう目を離せない。

そして、視線は彼の横へと移動する。馬鹿だと氣付ひていながら、また見てしまふ。彼の横で微笑む存在を。愛らしい顔をした少女の姿を。

どくん、と心臓の音が耳に響いた。足が地面に暑さで溶けてくつつひたかの様だ。動かない。ぐらりと視界が歪んだ。それでも、二人の姿は視界の中心を捉へたまま。吐き氣が、酷い。重心が本来何処にあるべきなのかが分からない。意識が遠のきそうだ。

二人は、仲良く談笑をしながら雑踏の中に消えた。と、同時に蟬の声が聞こえた。地面に張り付ひていた足がいとも簡単に離れ、雑踏の中を難なく進み始める。ただ、吐き氣が。酷い吐き氣だけが残り、私は地面にうずくまつてしまいたい衝動に駆られた。呼吸が浅く、早い。手の甲で首を拭うと、べつたりと甲が濡れた。

暑さのせいだ。

私はじりじりと照り付ける太陽を見上げる。

全ては暑さのせいなのだ。この動機も眩暈も何もかも。

そうして、私は自分に含める様に言ひ聞かせる。恋などと云ふものは妄想だ、他愛無き幻想だ。星の数ほどいる人々の中の誰か一人の事で頭が一杯になることなど有りはしないのだ、と。

正論じみた馬鹿な論理で自らを振し伏せようと、必死になつて足掻くのだ。

恋と云ふものに諦めを覚えたのは何時のことだろう。

それは、きっと決して叶わない恋に氣付ひてしまつた、その瞬間。

もちろん
僕たちは気づいてる
この気持ちに

たぶん
私たちはわかつてる
この想いを

僕たちはずっと一緒だった
隣の家に生まれて
子供の時から一緒に育った
折り紙をした
おままごもした
女の子の遊びだとみんなは笑ったけれど
君と同じことがしなかった

私たちはずっと一緒だった
お母さん同士が友達で
小さい時から一緒に育った
木登りをした
野球ごっこもした
男の子の遊びだとみんなは笑ったけれど
君と同じことがしなかった

中学に入った頃
君は先に帰るようになった
僕を名字で呼ぶようになった
だけど
名前呼びそうになって言い直す君が可愛いから
僕はつい笑ってしまって怒られた

中学に入った頃
君を避けるようになった
君を名前で呼ぶのもやめた
だけど
いつも名前呼びそうになって言い直して
君はそんな私を見て楽しそうに笑ってた

いつからか
あいつと呼んでいた君のことを
心の中で【あのこ】と呼ぶようになった

いつからか
あいつと呼んでいた君のことを
心の中で【あのひと】と呼ぶようになった

でも
もちろん僕は気づいてる
きつと君も気づいてる
この気持ちは、口に出したら終わってしまう

でも
もちろん私はわかつてる
たぶん君もわかつてる
この想いは、声に出さなくても大丈夫

僕たちはずっと平行線
交わることは決してない

私たちはずっと平行線
離れることは決してない

平行線の恋

もし人生をやり直せるなら、生まれた瞬間からがいい。新しい名前を授かつて、新しい人間として、全く別の人生を歩みたい。

ほんまに「ア」

一目惚れ、なんて有り得ないと思っていた。

小学生のときの初恋の相手も、中学時代ずっと片思いしてた人も、高校で気になっていた先輩も——皆、親しくなつて少しづつ、その人を意識するようになっていた。

でも、彼は違った。

大学に入つて、入学式で彼を見た瞬間に分かった。私にとって、彼は他の人とは違つた。

それからというもの、キャンパスを歩くたびに人波に目をやった。偶然を信じて、電車の中でも彼を探した。名前も学部も分からない彼と、少しでも関わりを持ちたかった。

でも、彼を見かける機会はなかった。

何の接点も無い彼と、どうしたら親しくなれるのか思いもつかず、縁が無かつたのだらうと、諦めかけていた。

なのに今、私はその彼と話をしている。

友人の志保と、遅めの昼食をとっていたときだった。

「久しぶりー。」

そう言つて空いていた席を指したのは、彼だった。

「宮本じゃん！ ほんと久々だね。」

突然のことに、私はただ驚くばかりだった。

「あ、いつ同じ高校の宮本。」

「いきなりごめんね。懐かしさのあまりつ

い。」

二人はそう言つて、一斉に私の方を見た。

「お昼、一緒にしてもいい？」

いざ喋ってみると、彼——宮本くんは想像以上に接しやすい人だった。□数の少ない私とも、笑顔で話してくれた。

こんなに話しやすい人なら、いつそ入学式のときに声をかければ良かったかな——などと思い、すぐに自分が人見知りであることを思い出す。

「ねえねえ、折角だからアドレス聞いてもいいかな？」

「うん、もちろん！」

携帯を取り出した彼に、思わず即答してしまった。

「じゃあ俺受信するから、赤外線送ってもらえる？」

「……いいよ。……はい、送ったよ。」

精一杯の笑顔で言つたつもりだったが、不自然ではなかつただらうか。

「……えっ？」

「」の反応、嫌な予感がする……。

「」の……名前？ 何て読むの？」

彼の指差す向きには『恋愛愛』の文字。

「……あ」

「ごめん、もう一回。」

「……」あ。

「……」「ア……ちっ？」

「…………うん。」

もし人生をやり直せるなら、とりあえず別の名前になりたい。

紅恋

その口唇は 薔薇のような真紅で

その頬は 林檎のように赤く染まり

茜色の雲が浮かぶ 空の下で

朱色の花が咲く 丘の上で

キミは 潤んだ瞳でボクを見上げ

声は 千切れそうなくらい弱々しくて

それでも 声は届いたから

ボクの心は 紅蓮の炎に包まれたようで

きつと頬は キミと同じ色に染まっていた

* * *

二人は 夕日と共に丘を下っていく

いつまでも 暮れないように同じ方へ

コンテスト結果

コラム番号	コラムタイトル	点数	順位	特別賞
		まじょコメント		
01	おちる	5 pt	4 位	0 sp
		「恋」の視点から見た「人間」の振る舞いというアングルの取り方が秀逸です。ああ、そーゆーふうに見えるのかぁというアングル変化を楽しみつつ、恋への落ち方/避け方パターンの解析へと洞察も深まって、スイーツ(笑) どころか、ぴしりとシニカルなワサビの効いた作品になりました。 2 週連続表紙の快挙！ 作品もファッションもスタイリッシュで、とてもすてきでしたよ、お嬢様。		
02	F A L L I N L O V E	0 pt	9 位	1 sp
		むずかしい。いっけん、蝶の3 変化（へんげ）。なのにフォントは4 変化。どして？ 地面とキスって、なあに？ けっきょく、飛び降り、あいきゃんふらい、なの？ T A さんは、そう解釈して、伝統のダーク枠「2」に割り振ったようなのですが、ううむ。 特別賞：フォント変えすぎで賞 by I love You 班（この長さで3 回も変えたのはどうしてなのでしょうか！）		
03	恋愛と恥に関する考察	7 pt	3 位	0 sp
		大問題に真正面から斬り込んだ、その意気や良し。骨太正統派でした。 ただ、前半の恋と愛との相違、という論点と、後半のなぜ恥ずかしいのか、という論点が、ややつながっていない感が。前半は話の入り口程度に押さえて、後半の論点だけで攻めたほうが、もっと緊密に仕上がったのではと思います。 ともあれ、堂々たる正統派をしっかり受けとめてもらえての価値あるブロンズ・メダルですね、おめでとう！		
		3 pt	6 位	4 sp

04	大阪少年の恋	あほやなあ。。。 明るく楽しくロストラヴ。 北海道から出発し、はんなり京都弁に加え、こてこて大阪弁までマスター。まさにグローバルな家系のカゲヤマさんならではのですね。「鏡」にツッコミを集中させたのは、狙い通り？ めでたく6番さんに競り勝って、最多特別賞&イチオシフリーズ大賞です。おめでとう。 特別賞：鏡はやめま賞by 平行線班 / 歪みねえな賞 by B4U班（ペアアアアアアン） / ミラーマン賞 by Wonderful Works班（自分のことが） / 花はまた咲くで賞 by ブロークンハート（＝新しい恋のはじまり）班（がんばれ大阪少年） イチオシフリーズ：「わいは自分のことがずっと好きやったんやあっ！」（でもちょっと不自然だそうです）「ずっと鏡で見とったんやあ」「ペアアアアアアン」× 2
05	ソノの丘で	12 pt 2 位 0 sp 時を超えて生きる者の達観・諦念。その悠久の時の流れが、少年のとんがった覇気によって、小さく揺さぶられる。何かがゆっくりと始まってゆく予感。壮大な物語の序章のような。 二段組みに回帰しちゃったけれど、それだけの懐の深いドラマを立ち上げて、筆力・構成力、そしてイマジネーション喚起力、すべての点において、あざやかでした。 おめでとう、シルバー・メダル!!
06	無題（新明解）	0 pt 9 位 3 sp B L ? にじげん？ いろんな解釈可能。 間口の広さが身上でしょうか。ちと読者に投げすぎの気もするけれど、まあ、特別賞もイチオシフリーズも、ざっくざくだったから、終わり良し、ってことで。 特別賞：辞賞 by Ralalala.....班（新明解サイコー） / Wikipedi賞 by Snowface班（Wikipediaに載ってた） / ベスト引用賞 by はあと班（新明解の人ががんばったb） イチオシフリーズ：「辞書ごときに俺は縛られない」× 2 「1 1 1 1

		1 1 1」
		4 pt 5 位 1 sp
07	恋し思ひ	敢えて古風な文体という挑戦が、この内省的な思索をよく支えています。漱石さんばい？ 陽炎が、つかのま見せた幻影。心情描写はしっかり描ききっているのですが、「外」の風景——男子生徒の姿の形容とか——にピンポイントで「色」＝個性が着くと、もっとあざやかに見えてくるのでは。 でも、さいごのさいごで、ストーリーを離れた冒険、典雅に舞っていたきました、ブラボーお姫さま。 特別賞：夏でも溶けない SNOWFACE賞 by 太陽班（可奈子の半年後だろうと。）
		24 pt 1 位 1 sp
08	平行線の恋	レイアウトと内容がきれいに響きあって、幼なじみの恋未満。 こういうのって、交わることも離れることもなく、たぶんだんだんと薄くフェイドアウトしてゆくのでしょう。 そんな二人の距離感がしみじみ伝わってきます。 神作品とまで称えられての圧勝首位は、作者さん冥利に尽きますね。おめでとう、夢のファイナル金メダルっ!!! # T Aさんたちが、漸近線の恋、とか言って盛り上がったのは、ここだけの話。 特別賞：神作品で賞 by 風車班（この班では絶賛でした） イチオシフレーズ：「交わることは決してない 離れることは決してない」「離れることは決してない」（だてに平行じゃない！）
		3 pt 6 位 0 sp
09	ほろ苦いココア	

		えー、ココアちゃんって、かわいいじゃん！ が読後第一感なのですが、が、が。 他人から見たら小さな悩み、でも、本人にとっては大問題。軽やかに展開しつつも、そんなメッセージがひそかに入っているのかな、と読みました。 深読みすれば、彼の名前が「宮本」だから、きっとまだダメなんですよ、うん。「森永」だったら、セーフなのでは？ いやいや、ヴァンホーテン伯爵が白馬に乗って迎えにきてくれるのを待ったらよいのでは？？ なんてね。
10	紅恋	2 pt 8 位 0 sp ロマンティックと見せかけて、オヤジギャグ。 まるで、そう、女子大班の中に咲いた一輪の黒い薔薇。 あたたかな夕陽に染まる今年度の読み納めでした。おしあわせにっ。 イチオシフレーズ：「紅恋」（ぐれん？）